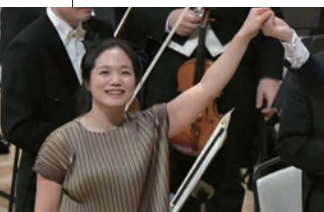


2020年4月定期公演は
新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため
すべて中止いたしました

1997年に「N響ベスト・コンサート」として始めて以来、
今回で23回目を迎える「最も心に残ったN響コンサート&ソリスト」。
2019年1月～12月に行われた定期公演から、
演奏をお聴きになったみなさまに投票をお願いし、
今年は580近くの票が集まりました。
みなさまの思い出がどのように順位に反映されているでしょうか。
投票にご参加いただいたみなさま、
ご協力ありがとうございました。



2019



N響 ソリスト &

最も心に残った



最も心に残ったN響コンサート2019

第1位 | 10月Aプロ | 第1921回 10月5、6日

グラス／2人のティンパニストと管弦楽のための協奏的幻想曲(2000)

ショスタコーヴィチ／交響曲 第11番ト短調 作品103「1905年」

井上道義(指揮) 植松 透、久保昌一(ティンパニ)



大好きなショスタコーヴィチ《第11番》、ここまで濃密に訴えてきた演奏は初めてです。さすがはショスタコの大家ミッキー。(佐々木一郎)

グラスの協奏曲を見たいと思って行ったら、ショスタコーヴィチの超名演と出くわすことができて、本当に幸せの限りです。(稲田公弘)

グラスの《ティンパニ協奏曲》がナンバーワンです! 躍動する植松さんと冷静沈着な久保さんがすばらしかった。特注の指揮台の上で楽しそうに指揮する道義さんがまた素敵でした。会場の盛り上がりも最高でした。(宮垣美和子)



井上先生が、「ショスタコーヴィチは僕自身だ!!」と公言していた通り、本当にNHKホールにショスタコーヴィチがいるのではないかと錯覚したくらい、すごい演奏だった。(秦野純也)

井上さん最高! ルーティンではない一期一会。(猪股俊人)

差別・迫害・弾圧に苦しんでいる人たちが今も世界中にいます。不条理に対する彼らの怒り・悲しみが決して癒やされない現実を思うと、《交響曲第11番》はとても厳しくて辛いショスタコーヴィチ体験でした。巨匠ミッキーにとっては、まさに自家薬籠中の作品ですね。(北澤康秀)

井上さんのショスタコーヴィチはやはり聴き逃さないです。入魂の指揮に全力の機能美で応えるN響の演奏が感動的。池田さんのイングリッシュ・ホルンには泣けました。また前半での植松さん、久保さんのカッコよさと言ったら! (村田富生)

ティンパニストおふたりの圧倒的な存在感と、それと競り合うかのようなマエストロ井上の熱いパフォーマンスで、初めて聴いた曲にも関わらず心拍数が上がりまくった。(嶋田真理子)

第2位 9月Cプロ

第1919回
9月20、21日

R. シュトラウス／歌劇「カブリッショ」から「最後の場」*

マーラー／交響曲 第5番 嬰ハ短調

パーヴォ・ヤルヴィ(指揮) ヴァレンティーナ・ファルカシュ(ソプラノ)*



マーラー《第5番》を初めて聴き、管楽器の多さに驚いた。ホルンが6本、フルート4人が全員ピッコロに持ち替え、吹奏楽よりも管楽器の圧がすごかった。だからこそ、弦楽器のみの第4楽章がとても引き立ち、1時間を超える楽曲だったが、一瞬に感じた。ブラボー! (五十嵐早紀)

マーラー《第5番》、各楽器の鮮やかな音色とテクニックを引き出していて素晴らしい演奏だった。なかでも第3楽章のホルン福川さんによるスタンディングでの演奏は見ても効果的だった。(向山尚志)

第3位 11月Aプロ

第1925回
11月16、17日

ステンハンマル／ピアノ協奏曲 第2番 ニ短調 作品23

ブラームス／交響曲 第3番 ヘ長調 作品90

ヘルベルト・ブロムシュテット(指揮) マルティン・ステュルフェルト(ピアノ)



1973年9月からの定期会員ですが、この46年間でこれだけすごい拍手が巻き起こったのは聴いたことがありません。強まるばかりの拍手に思わずのアンコールが行われ、再度ブラームスの第3楽章が聴けたのは、何よりの僥倖^{きようこう}でした。(田中彰博)

ブロムシュテットさんの愛とあたたかさにあふれたブラームス。数日間幸福感^{よひん}の余韻が続きました。(青谷匡美)

初めて聴いたステンハンマルの味わい深さ。そして極めつけのブラームス。力強さ、寂しさ、物哀しさ、優しさ、さまざまな音の表情を感じられたこの上ない幸せな時間でした。(石井秀明)

第4位 11月Cプロ

第1926回
11月22、23日

モーツァルト／交響曲 第36番 ハ長調 K. 425「リンツ」、ミサ曲 ハ短調 K. 427

ヘルベルト・ブロムシュテット(指揮) クリスティナ・ランツハマー、アンナ・ルチア・アリヒター(ソプラノ)

ティルマン・リヒディ(テノール) 甲斐栄次郎(バリトン) 新国立劇場合唱団(合唱)



いつか聴きたいと思っていたモーツァルトの《ミサ曲》、念願叶いました。ソリスト、コーラス、オーケストラどれもすばらしかったけれど、ブロムシュテットさんの神に寄り添うような指揮に感銘を受けました。(齊藤敏浩)

モーツァルトの《リンツ》は、さまざまな指揮者で聴きましたが、音のまとまり、柔らかさなど、すばらしかったです。N響の音を最も良い形で引き出していました。(岡崎 恒)

荘厳な《ミサ曲》。重さと華やかさを備えた、まさに名演でした。(今井達朗)

第5位 | 11月Bプロ | 第1924回 11月6、7日

ベートーヴェン／交響曲 第3番 変ホ長調 作品55「英雄」

R. シュトラウス／交響詩「死と変容」作品24

ワーグナー／歌劇「タンホイザー」序曲

ヘルベルト・ブロムシュテット(指揮)



ブロムシュテットさんの《英雄》は何度か実演を聴いてきましたが、毎回新しい発見があります。今回はその中でも特に力強い演奏でした。(福島英和)

独逸系の音楽の指揮者として王道を行く92歳のブロムシュテットの指揮を聴くことができるのは幸せなことです。N響のメンバーや聴衆のリスベクトが感じられました。(西川義尚)

《死と変容》の繊細さ、美しさに感銘し、もう1度同じプログラムを聴いておきたいと思い、いわき公演まで行きました。(高橋國美)

第6位 | 10月Cプロ | 第1922回 10月18、19日

バラキレフ(リャプノフ編)／東洋風の幻想曲「イスラメイ」

ラフマニノフ／バガニューニの主題による狂詩曲 作品43*

チャイコフスキー／交響曲 第4番 へ短調 作品36

トゥガン・ソヒエフ(指揮) ニコラ・アンゲリッシュ(ピアノ)*



チャイコフスキーの《第4番》は今までに聴いたことのない新しい解釈で、体が熱くなり大興奮のプログラムでした。ソヒエフさんとN響とのコンビネーションもすばらしく、この公演が文句なしに一番よかったと思います。(福地あゆ美)

ソヒエフの手からは魔法が出ているようで、普段のN響とは音が違っていた。(北 靖彦)

ニコラ・アンゲリッシュは初めて生で聴きましたが、とても繊細な演奏で、至福の時間でした。(岡田佳世)

第7位 | 1月Bプロ | 第1904回 | 1月16、17日

フォーレ／組曲「ペレアスとメリザンド」作品80

ブリテン／シンブル・シンフォニー 作品4

リムスキー＝コルサコフ／交響組曲「シェラザード」作品35

トゥガン・ソヒエフ(指揮)

第8位 | 12月Aプロ | 第1927回 | 11月30日、12月1日

メシアン／忘れられたさざげもの

ブロッホ／ヘブライ狂詩曲「ソロモン」*

コレリ／合奏協奏曲 第8番ト短調「クリスマス協奏曲」

メンデルスゾーン／交響曲 第5番ニ短調 作品107「宗教改革」

鈴木優人(指揮)、ニコラ・アルトシュテット(チェロ)*

第9位 | 6月Bプロ | 第1917回 | 6月19、20日

メシアン／トゥランガリア交響曲

バーヴォ・ヤルヴィ(指揮)、ロジェ・ムラロ(ピアノ)、

シンシア・ミラー(オンド・マルトノ)

第10位 | 2月Aプロ | 第1906回 | 2月9、10日

R. シュトラウス／ヴァイオリン協奏曲ニ短調 作品8

ハンス・ロット／交響曲 第1番 ホ長調

バーヴォ・ヤルヴィ(指揮)、アリョーナ・バーエフ(ヴァイオリン)

最も心に残ったソリスト2019

第1位 | 10月Aプロ
第1921回 | 10月5、6日

植松 透、久保昌一(ティンパニ)

グラス／2人のティンパニストと管弦楽のための協奏的幻想曲(2000)



ティンパニをクローズアップした曲をあそこまで完璧に叩けるなんて! (森脇佳代)

躍動感のある植松氏とクールな久保氏の掛け合いコントラストがおもしろく、超絶技巧はもちろん、ティンパニってこれだけ歌えるんだぜ! っておっしゃっているようで、とても楽しかったです。テレビ放送も普段は一瞬しか映らないティンパニがたっぷり見られて大満足。この楽器がますます好きになりました。(J. S.)

N響をいつも最後列から支えるおふたりが、最前列で華麗に舞うように演奏される姿に感激。(K. K)

2台のティンパニ・ソロの曲を聴くのは初で、超絶技巧に圧倒されました。すごく楽しくてN響のイメージが変わりました。(立石園子)

生真面目なイメージがあったN響のティンパニの2人がとてもイキイキして輝いていたのがとても印象に残った。演奏を楽しんでいる様子が伝わってきて、こちらも楽しくなった。(宮武 篤)

第2位 | 9月Bプロ
第1920回 | 9月25、26日

エマニュエル・パユ(フルート)

ニルセン／フルート協奏曲



熱量のあるニルセンの曲にふさわしく、パワフルかつ七色の音色を持つ素晴らしい演奏。(菊池啓宙)

あまり聴く機会のないニルセンの協奏曲ですが、曲想を明確に表現していて、たいへん楽しめました。(松岡 豊)

第3位 | 4月Cプロ
第1910回 | 4月19、20日

河村尚子(ピアノ)

矢代秋雄／ピアノ協奏曲(1967)



矢代秋雄の《ピアノ協奏曲》は日本が誇る名曲だと再確認させてくれました。弾き終わった後の河村尚子さんの充実感満載の笑顔は今でも印象に残っています。(豊島 立)

これだけ劇的な矢代作品は初めて聴きました! (古川克己)

第4位 | 6月Cプロ | 第1916回 | 6月14、15日
ギル・シャハム(ヴァイオリン)
ベルク／ヴァイオリン協奏曲「ある天使の思い出のために」

第5位 | 6月Aプロ | 第1915回 | 6月8、9日
マティアス・ゲルネ(バリトン)
マーラー／こどもの不思議な角笛

第6位 | 12月Bプロ | 第1929回 | 12月11、12日
ダニエル・ハリトーノフ(ピアノ)
リスト／ピアノ協奏曲 第1番 変ホ長調

投票を通じて寄せられたみなさまの声

高校3年生から定期会員になって今年で2年目になるのですが、毎回の公演がほんとうに楽しみで、テレビ放送もいつも録画しています。友達とN響の公演の話をすることもあり、自分にとってN響は欠かせない存在です! (岡田 航)

毎月飛行機に乗って聴きにきて、終わったらすぐに慌ただしく空港へ向かっております。お金も時間もかかりますが、名演奏が目の前で繰り広げられる歴史の一場面に立ち会える喜び、本物に出会える感激を考えると、私はお金や時間にかえられない何かをもらっていると思います。(ヤマウチユカ)

演奏会に来られない時も、ラジオ中継を楽しませていただいております(休憩中の解説もお得だと思って勉強させていただきます)。(森しのぶ)

仕事帰りにサントリーホールでクラシックを聴くという行為がものすごく好きで、毎月Bプロを楽しんでいます。P席で指揮者の表情を見ながら、管楽器と打楽器の音の響きを体に感じるの、至福の時間。今後も楽しみにしています。(田島幸子)

コンサートマスターのマロさんがきっかけで、オーケストラを聴くようになりました。地方に住んでいるので、なかなかホールに行けませんが、これからも『クラシック音楽館』を楽しみにしています。(渡辺百合)

曲との「出会い」を楽しみに毎月来ているので、あえて予習せず聴くのですが、それが逆に新鮮でおもしろいです。これからも幅広い曲をやってくださいとうれしいです。(川村利奈)

6月まで定期会員をしていましたが、子供が生まれることになり、地方に住んでいることもあって、定期会員はしばらく育休です。けれど、絶対に復帰します!(武石弘之)

東京・春・音楽祭のワグナー・シリーズは、必ずしも舞台演出がなくてもワグナーの魅力が表現できることを証明してしまった意味で、非常に価値のある演奏会になっていると感じています。(平井 成)

1961年から定期会員ですが、以前の公演で最も印象に残っているコンサートベスト3は、1位がスウィートナー指揮のブラームス《ハイドンの主題による変奏曲》(1974年)、2位がシュタイン指揮、漆原朝子独奏のブラームス《ヴァイオリン協奏曲》(1990年)、3位がマタチツチ指揮のブルクナー《交響曲第8番》(1984年)です。(石川禎祐)

フィリップ・グラスやジョン・アダムズといった、今を生きる作曲家による音楽が聴けて新しい発見を味わうことができました。また、行きたいプログラムが多く、いろいろな時代の作曲家を扱っていて、とても勉強になりました。これからもN響の音楽を楽しみたいです!(宮垣輝希)

招聘してほしい指揮者 ベスト5

- ①シャルル・デュトワ
- ②サイモン・ラトル
- ③エサ・ベッカ・サロネン
- ④ファビオ・ルイージ
- ⑤ヘルベルト・ブロムシュテット

招聘してほしいソリスト ベスト5

- ①五嶋みどり
- ②マルタ・アルゲリッチ
- ③ユジャ・ワン
- ④ヒラリー・ハーン
- ⑤バトリツィア・コパチンスカヤ



© Donald Dietz

きかせどころのツボは外さない
一流のエンターテイナーとしての芸の深さ

初共演から36年
オリンピックイヤーに現れるマエストロ

レナード・スラットキン。NHK交響楽団を初めて指揮したのは、1984年10月の定期公演のことである。40歳になったばかりの若さで、知名度を一気に高めていた時期だった。

アメリカのマイナー・オーケストラのひとつにすぎなかったセントルイス交響楽団の評価と人気を、1979年の音楽監督就任からわずか数年で全米有数の水準にまで高めてみせたことで、世界的に注目の的となっていたのである。

それから36年をへて、今回が10回目の客演となる。長く、そして数多く共演を重ねているだけに、楽員からの信頼も^{あつ}篤い。N響の近年の歴史を語る上で欠かせない指揮者のひとりである。

これは単なる偶然だと思うが、2008年以降の客演は4年おきで、みなうろう年でオリンピックイヤーで、そしてアメリカの大統領選挙のある年になっている。それ以前も合わせると、なんと10回のうち9回がオリンピックイヤーなのだ。

オリンピックの年に現れて、忘れがたい印象を残していく男。それがN響におけるスラットキンである。

多様性の魅力を
味わわせてくれるプログラム

その指揮ぶりは、丸みのある短いフレージングで、メロディを明快に歌わせる。サウンドは中

今月のマエストロ

レナード・スラットキン

Leonard Slatkin

文◎山崎浩太郎 | Kotaro Yamazaki

音主体に、金管の高音や打楽器の低音の刺激を抑え、耳になじみやすく響かせる。しかし、きかせどころのツボは外さない。その語り口は巧みで、とても心地のいい、わかりやすくて活気に満ちた音楽づくりをしてくれる。小難しい理屈をならべて煙に巻く芸術家気取りとは無縁の、本物の、一流のエンターテイナーとしての芸の深さをもつ指揮者である。

前回2016年の客演では、バッハ作品のオーケストラ編曲をまとめたプログラムが特に面白かった。《無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第3番》の〈前奏曲〉を3回、異なるスタイルでくり返す。まずコンサートマスターの伊藤亮太郎が原曲を独奏。次に、バッハ自身が《カンタータ「神よ、あなたに感謝をささげます」》のシンフォニアに転用した、オルガンとオーケストラによる編曲。そして3回目は、イギリスのヘンリー・ウッドによる、ロマン派風の華麗な編曲。オーケストレーションによって同じ音楽がどのように変容していくかを、極上の演奏で楽しませてくれた。

今回も、意欲的なプログラムとなっている。「クラシックの王道」というべき19世紀ドイツの作品は、Bプロのメンデルスゾーンの《ヴァイオリン協奏曲》のみ。20世紀と21世紀のアメリカの作品が主体となり、日本とイギリス、ドイツ語圏の曲が加わる。

音楽は世界共通の言語といわれるが、同時に各国の特徴や歴史も、それぞれの作品に刻印される。普遍性と特殊性が共存するところに

個性が育ち、魅力ある音楽が生まれる。その多様性の魅力を味わわせてくれるプログラムとなるだろう。

[やまざき こうたろう／音楽評論家]

プロフィール

ロサンゼルス生まれのアメリカの指揮者。現在はアメリカのデトロイト交響楽団の桂冠音楽監督とフランスのリヨン国立管弦楽団の名譽音楽監督の地位にある。

両親はハリウッド弦楽四重奏団のヴァイオリニストとチェリストだった。父のフェリックスはハリウッド・ボウル交響楽団の指揮者としても活躍したので、父子2代続けての指揮者ということになる。

ジュリアード音楽院などで学び、1966年に指揮者デビュー。1979年にセントルイス交響楽団の音楽監督に就任すると、アメリカでもトップクラスの実力と人気を誇るオーケストラに成長させたことで一躍名声を得た。以後もワシントンのナショナル交響楽団の音楽監督(1996～2008)、イギリスのBBC交響楽団の首席指揮者(2000～2004)のポストを歴任し、並行して世界各地の一流オーケストラに客演している。

NHK交響楽団を初めて指揮したのは1984年の定期公演で、以来1988年、1993年、1996年、2000年、2008年、2012年(1月と9月の2度)、2016年と数年おきに客演して関係を深めている。[山崎浩太郎]

レナード・スラットキンの
指揮するプログラム詳細はこちら

PROGRAM A ▶ P. 16

PROGRAM B ▶ P. 20

PROGRAM C ▶ P. 24

A

第1936回

NHKホール

4/11 土 6:00pm

4/12 日 3:00pm

指揮 | レナード・スラットキン | 指揮者プロフィールはp.15

サクソフォーン | ブランフォード・マルサリス

コンサートマスター | 伊藤亮太郎

細川俊夫

冥想〜3月11日の津波の犠牲者に
捧げる〜(2012) [14']

ジョン・アダムズ

サクソフォーン協奏曲(2013) [32']

I アニマート

II モルト・ヴィーヴォ

—— 休憩(20分) ——

ヴォーン・ウィリアムズ

交響曲 第5番 二長調 [39']

I 前奏曲:モデラート

II スケルツォ:プレスト・ミステリオーソ

III ロマンズ:レント

IV パッサカリア:モデラート

Artist Profile

ブランフォード・マルサリス (サクソフォーン)



© Philip Kersley

ニューオーリンズの伝統あるジャズ一家に生まれ、20代の頃からマイルス・デーヴィスやスティングといったミュージシャンのバンドに^{はつてき}抜擢される。2001年のグラミー賞では『コンテンポラリー・ジャズ』で最優秀ジャズ・インストゥルメンタル・アルバム賞も獲得するなど、弟ウィントンと共に1980年代以降から現在までジャズシーンを常に先導してきたジャズ・サクソフォーン奏者である。1986年、2001年、2009年と継続的にクラシック音楽の

アルバムを発表するなど、クラシックのサクソフォーン奏者としての活動にも力をいれている。近年は2010年と2011年にアンドレイ・ボレイコ指揮のニューヨーク・フィルハーモニックとグラズノフやシュルホフを、2015年にエドウィン・アウトウォーター指揮の東京都交響楽団とジョン・アダムズを、2016

年にクリスティアン・ヤルヴィ指揮のバイエルン国立歌劇場管弦楽団とミヨーとヤコブ・テル・ヴェルデュイを、2017年にはスザンナ・マルツキ指揮のシカゴ交響楽団とフォーレ、ジョン・ウィリアムズを共演。その美しく繊細なサウンドに加え、ジャズ・ミュージシャンらしい鋭敏なリズム感を活かしたパフォーマンスで絶賛を博している。

[小室敬幸／音楽ライター]

Program Notes | 岡部真一郎

ほぼ同時期、2010年代前半に作曲された日米の対照的とも見える2作品と、第2次世界大戦中の英国の名曲とを組み合わせたプログラム。殊に20世紀・21世紀の音楽作りに定評ある指揮者スラットキンの美質が存分に味わえよう。マエストロと同じく音楽一家出身にして、幅広い活動を展開するマルサリスとの共演も愉しみだ。

細川俊夫

冥想～3月11日の津波の犠牲者に捧げる～(2012)

わが国を代表する作曲家のひとりで、国際的にも華々しい活躍を続ける細川俊夫(1955～)は、かねてから、自然と人間の交感を創作の大きなテーマとしてきた。

彼にとって、2011年3月11日の大震災、津波、原発事故、そしてそこに生まれた数々の悲劇は、ドイツを拠点のひとつとして久しければなおさら、一層の重みを持つものであったに違いない。

これを契機として、細川はいくつもの作品を世に問うた。ハンブルク国立歌劇場で初演された《歌劇「海、静かな海」》(2015)はもとより、ヴィオラ独奏作品、そして管弦楽3部作が書かれている。ザルツブルク音楽祭委嘱作品であるトラークルの詩による《嘆き》(2013)、ヘッセの詩に基づく《嵐のあとに》(2015)が共に声楽を伴い、上述のオペラとも遠く響き合うのに対し、第1作《冥想～3月11日の津波の犠牲者に捧げる～》は純器楽作品である。

作品は「宇宙の鼓動」と記された大太鼓、タムタムと低弦のピチカートに始まる。周期的に現れるその律動の上には、作曲家が毛筆的と述べる「書」が弦や木管などで描かれていく。やがて、アルト・フルートが「冥想」し、旋律が「悲しみの歌」へと発展する傍ら、打楽器は徐々に激しさを増し、管は波のように繰り返し押しは引いていく。

精緻なスコア、細川の音楽は、描写的、標題的な表現の表層をやすやすと越え、その奥からむしろ極めて精神的、抽象的な力を生み出している。

統営国際音楽祭の委嘱により作曲された本作は、音楽祭音楽監督を務め、初演の指揮をとったリープライヒに献呈された。

作曲年代	2012年
初演	2012年3月23日、統営、統営芸術センター、アレクサンダー・リープライヒ指揮、統営音楽祭管弦楽団
楽器編成	フルート2(ピッコロ1、アルト・フルート1)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン1)、クラリネット1、バス・クラリネット1、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、タムタム、ボンゴ、大太鼓、ウッド・ブロック、アンティーク・シンバル、鈴[りん](ティンパニ上)、弦楽

ジョン・アダムズ

サクソフォン協奏曲 (2013)

アメリカにおけるミニマル・ミュージック第2世代の旗手、ジョン・クーリッジ・アダムズ(1947～)は、出世作《中国のニクソン》(1987)以降、《エル・ニーニョ》(1999)など、数多くのオペラ／オラトリオの創作を続けている。その中のひとつ、《もう一人のマリアによる福音書》(2012)がイエスの生涯最後の数日を描くのに対し、直後に書かれた《サクソフォン協奏曲》は、一見、全く異なる外観を呈する。しかし同時に、作曲家自身は、各々の作品冒頭の上行音型をはじめ、旋法性、そこから生まれるハーモニーの色彩感など、両者には共通点があるともいう。

スウィング・バンドで演奏していた父の影響もあり、アダムズにとって、サクソフォンは早くから身近な存在だった。《中国のニクソン》において、オーケストラで強い個性を発しているのが他ならぬこの楽器である。さらに彼は、近作、ジャズのエッセンスを持つ交響曲《シティ・ノワール》(2009/2013)で、作品の中核にアルト・サクソフォンを据えた。「チャーリー・パーカーのような」スタイルで、しかもクラシックの教育を受け、交響楽団の中で演奏できる、という困難な条件を見事に満たし、初演を成功に導いたのが、アメリカの名手、ティモシー・マカリストだった。

親交を深めるにつれ、彼にはさらに大きな可能性があるというアダムズは確信する。マカリストによれば、「君のために曲を書きたい」と初めてアダムズに言われたのは、2011年3月のことだったという。シドニー交響楽団をはじめ、4楽団共同委嘱により書かれた作品は、初演者マカリストに献呈された。

全曲は、上述の《シティ・ノワール》をはじめ、アダムズの管弦楽作品にしばしば見られる2部構成。第1部は、大きく分けて急緩の2つの部分からなる。作曲者が「ファンク・ロンド」と呼ぶ第2部、前へ前へと駆り立てるような急速なパルスがそれに続く。

作曲年代	2013年
初演	2013年8月22日、シドニー、シドニー・オペラハウス、ティモシー・マカリスト独奏、作曲家指揮、シドニー交響楽団
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン1)、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、ハープ1、ピアノ1、チェレスタ1、弦楽、アルト・サクソフォン・ソロ

交響曲 第5番 ニ長調

ロンドンのロイヤル・カレッジに学んだほか、ケンブリッジ大学で歴史学などを修め、さらにパリでモーリス・ラヴェル(1875～1937)に師事して研鑽^{けんさん}を積んだレーフ・ヴォーン・ウィリアムズ(1872～1958)の才能の開花は、遅かった。さまざまな影響から脱し、自らの道を見出したのは、30代半ばを過ぎてから。わが国でも広く親しまれる《タリスの主題による幻想曲》や《海の交響曲》などは、まさにこの時期の作品である。

かたや、第2次世界大戦中、1938年から1943年にかけて作曲された《交響曲第5番》については、ジョン・バニヤン(1628～1688)の『天路歷程』(1678/1684)との関係が言及される。オルコットの『若草物語』などにも影響を与えたと言われるこの寓意物語とヴォーン・ウィリアムズとの結びつきは、最初期、1906年、舞台上演のための付随音楽作曲にまで遡る。さらに彼は、当時、オペラ化の構想を温めたともいう。1921年、一部がオペラ化され、1942年、BBCの放送用に付随音楽が改めて書かれた後、ついに、《歌劇「天路歷程」》が完成を見るのは1949年。初演は1951年に行われている。

こうした経緯の中で、1930年代終わり以降、実現困難に思われていたオペラ創作のための素材は、《第5交響曲》にいくつか用いられるに至った。中でも、第3楽章の自筆譜には、バニヤンを引用した書き込みも見られる。さらに、1938年、野外劇のために書かれた音楽の素材もまた、この交響曲には用いられている。

一見したところ、伝統的4楽章ながら、作品は独自の構成を取る。プレリュディオ(前奏曲)と題された第1楽章冒頭、師、ラヴェルをも連想させるホルンのニ長調のモチーフは、チェロの開放弦など、低弦のハ音の上で奏でられ、夢想的、魅惑的空氣を醸し出す。第2楽章は、プレストの簡潔なスケルツォ。第3楽章ロマンスには、第2楽章のスケルツォと共通の4度上行のモチーフが聴かれることも目を引く。第4楽章は、ブラームスの《交響曲第4番》やウェーベルンをも想起させるパッサカリア。第1楽章冒頭のモチーフが回歸した後、全曲は静かに閉じられる。

初演は作曲家自らが指揮を執り、戦時下のロンドンで行われた。

作曲年代	1938～1943年
初演	1943年6月24日、ロンドン、ロイヤル・アルバート・ホール、作曲者指揮、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団
楽器編成	フルート2(ピッコロ1)、オーボエ1、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、弦楽

PROGRAM

B

第1938回

サントリーホール

4/22 水 7:00pm

4/23 木 7:00pm

指揮 | レナード・スラットキン | 指揮者プロフィールはp.15

ヴァイオリン | レイ・チェン

コンサートマスター | 篠崎史紀

ハイドン

交響曲 第70番 二長調 Hob.I-70 [18']

- I ヴィヴァーチェ・コン・ブリオ
- II 二重対位法のカノン的一种:アンダンテ
- III メヌエット:アレグレット・トリオ
- IV 終曲:アレグロ・コン・ブリオ

メンデルスゾーン

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64 [30']

- I アレグロ・モルト・アパッショナート
- II アンダンテ
- III アレグレット・ノン・トロツポー
- アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ

—— 休憩 (20分) ——

マクティ

交響曲 第1番～管弦楽のための
バレエ～ (2002) [30']

- I 序奏:オン・ウィズ・ザ・ダンス
- II アダージョ:ティル・ア・サイレンス・フェル
- III ワルツ:ライト・ファンタスティック
- IV 終曲:ウェア・タイム・プレイズ・ザ・フィドル

Artist Profile

レイ・チェン(ヴァイオリン)



鮮やかなテクニックは申すに及ばず、美しい歌心、パッションで聴き手を魅了するヴァイオリニストだ。2019/20年シーズンもピッツバーグ交響楽団、バンベルク交響楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、メルボルン交響楽団などと共演。大ホールでのリサイタルや室内楽も多い。

台北生まれのオーストラリア育ち。スズキ・メソード、シドニー音楽院で学んだ後、フィラデルフィアのカーティス音楽院に入学。名伯楽アーロン・

ローザンド(1927～2019)に師事した。

2008年、英カーディフで開催されたユーディ・メニューイン国際ヴァイオリン・コンクールで優

勝。翌2009年にはブリュッセルのエリーザベト王妃国際コンクールでも優勝し、^{ひのき}檜舞台に躍り出た。2011年4月、ダニエル・ハーディング指揮スウェーデン放送交響楽団とメンデルスゾーン、チャイコフスキーの協奏曲を録音。前述のコンクール本選で弾いた思い出のコンチェルトだった。2018年には、ブルッフの《ヴァイオリン協奏曲第1番》や、クライスラーやハイフェッツが活躍した古き良き時代の小品を収めたCD『ゴールデン・エイジ』をリリースした。使用楽器は日本音楽財団貸与の1735年製ストラディヴァリウス「サマズィユ」。NHK交響楽団とは初共演。

[奥田佳道／音楽評論家]

Program Notes | 小室敬幸

四半世紀にわたって共演を重ねてきたスラットキンが、N響で初めてフランツ・ヨーゼフ・ハイドン(1732～1809)とフェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ(1809～1847)を取り上げる。後者の《ヴァイオリン協奏曲》では若手ながらすでに巨匠の風格漂うレイ・チェンが独奏を務める。メインはスラットキンの妻マクティ(1953～)による《交響曲第1番》。9. 11の犠牲者に捧げられた第2楽章アダージョは、美しくも緊張感に満ちた名作だ。

ハイドン

交響曲 第70番 二長調 Hob. I-70

1760年11月26日、当時28歳だったフランツ・ヨーゼフ・ハイドンは、自分を支援してくれていたケラーの娘マリア(1729～1800)と結婚。彼女との生活は何もかもが上手いかなかったのだが、より良い職場を求めて転職活動中だったため、世間体を気にして離婚するわけにもいかなかったという。我慢の甲斐が^{ばってき}あったのか、翌1761年に大貴族エステルハージ家の副楽長に抜擢された(1766年に楽長へ昇進)。ハイドンの交響曲は《第104番》まで残されているが、その大部分はこのエステルハージ家に務めていた時代に書かれたもの。本作は新しい歌劇場のこけら落としのために作曲された。当時、当主の興味はオペラに集中していたため、交響曲が書かれる機会は激減していたのだが、本作における対位法志向などのように挑戦的な試みが一作ごとになされている。

第1楽章 ヴィヴァーチェ・コン・ブリオ。ソナタ形式で書かれており、祝いの場^{ふきわ}に相応しい雰囲気が始まる。展開部では旋律がカノンのように絡み合う。

第2楽章 アンダンテ。2つの主題が交互に変奏される二重変奏形式。主となる部分は転回対位法(声部の上下を交換しても成り立つ対位法)で書かれており、伴奏と旋律が前後半で入れ替わる。

第3楽章 アレグレット。対位法的な要素がほとんどない3部形式のメヌエット。

第4楽章 終曲：アレグロ・コン・ブリオ。いきなり短調に転じ、緊張感の高い三重フー

ガでクライマックスを築いていく。

作曲年代	1779年完成
初演	1779年12月18日、エステルハージにて、作曲者自身の指揮による
楽器編成	フルート1、オーボエ2、ファゴット1、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽

メンデルスゾーン

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64

1835年11月19日に父アブラハムが急逝すると、フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディはこれまでに感じたことのないような喪失感に見舞われる。彼自身「人生最大の不幸」だと述べたこの出来事を乗り越えるためには、新しい人間関係が必要だった。1836年5月にカルヴァン派牧師の娘セシル・ジャンルノー（1817～1853）と恋に落ち、1年も経たずに結婚。また同じく1836年にはメンデルスゾーンがカペルマイスターを務めるライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスターに、旧知のヴァイオリニストであるフェルディナンド・ダヴィッド（1810～1873）が就任した。こうした公私の充実なしに、1830年代半ば以降の創作活動は成り立たなかっただろう。本作はまさにダヴィッドとの関係の深まりがきっかけとなり1838年から作曲を開始。1844年9月16日に6年越しで仕上がった。初演後に改訂を施してから出版されたバージョンが今日、一般的に演奏される。保守的に思われがちなメンデルスゾーンだが、第1楽章冒頭から独奏が登場したり楽章間が切れ目なく繋がったりと、独自の試みも溢れている。

第1楽章 アレグロ・モルト・アパッショナート。古典的な枠組を丁寧に守ったソナタ形式。ただしセクションの切れ目を意識させずに横の流れを重視していったり、展開部のラストにカデンツァを移動させたりするところは実にロマン派的。こうした協奏曲の構成はチャイコフスキーなどにも受け継がれていく。

第2楽章 アンダンテ。シンプルな3部形式による、歌謡的な音楽。

第3楽章 アレグレット・ノン・トロッポーアレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ。前楽章の間部に登場した切ない旋律を思い起こさせる序奏にはじまるロンド・ソナタ形式。メンデルスゾーンが得意としたスケルツォ的な第1主題と、祝祭的で飛び跳ねるような第2主題が核となって、最後まで駆け抜けていく。

作曲年代	1838～1844年
初演	1845年3月13日、ゲヴァントハウスにて、フェルディナンド・ダヴィッドの独奏とニルス・ゲーゼの指揮による
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽、ヴァイオリン・ソロ

交響曲 第1番～管弦楽のためのバレエ～(2002)

2011年にレナード・スラットキン(1944～)と結婚したアメリカ人作曲家シンディ・マクティ(1953～)はアマチュア音楽家だった両親のもと、1940～1950年代のジャズを聴きながら育った。大きな転機となったのは大学時代にポーランドの作曲家クシシュトフ・ペンデレツキ(1933～)と出会ったこと。彼の子どもたちに英語を教える代わりに、ペンデレツキの家に1年間住み込みでレッスンを受けたのだ。当時のペンデレツキは前衛性が後退しつつあった時期なのだが、マクティは特殊奏法や微分音といった師の先鋭的な手法を取り入れるところから本格的な創作をはじめた。ところが1980年代に入ると、合唱曲で明快な協和音が使われたり、マッキントッシュ・コンピューターと出会ったことで取り組み始めた電子音楽ではミニマル・ミュージックのような反復性が表れたりし始める。そうした作風の変化を経て誕生したのが代表作《サーキット》(1990)であった。反復を軸とした疾走するオーケストラ・サウンドはその後のマクティの代名詞となり、スラットキンのために作曲されたこの交響曲でも踏襲されている。

第1楽章 序奏：オン・ウィズ・ザ・ダンス(楽章名はバイロン卿の詩からの引用)。全曲の核となる《運命》交響曲から発想した「ド・ミ・ド」という音形が提示され、そこからジャズ的なサウンドへと転じていく。

第2楽章 アダージョ：ティル・ア・サイレンス・フェル(テニソンの詩からの引用)。主旋律をペンデレツキ《ポーランド・レクイエム》から引用したマクティのオルガン作品《アニュス・デイ》(1998)を弦楽合奏に編曲した楽章で、バーバー《弦楽のためのアダージョ》を意識している。2001年9月11日に起きたアメリカ同時多発テロ事件の犠牲者に捧げられた。

第3楽章 ワルツ：ライト・ファンタスティック(ミルトンの詩からの引用)。ラヴェル《ラ・ヴァルス》をパロディ化した、短い円舞曲。

第4楽章 終曲：ウェア・タイム・プレイズ・ザ・フィドル(ドブソンの詩からの引用)。第1楽章の要素が回帰。《春の祭典》的な要素が混じり合いながら盛り上がり、最終的にはR.シュトラウスの《歌劇「サロメ」》の幕切れのように終わる。

作曲年代	2002年
初演	2002年10月24日、ワシントンD.C.のケネディ・センターにて、レナード・スラットキン指揮のナショナル交響楽団による
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ3、クラリネット2(バス・クラリネット1)、Esクラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、大太鼓、ハイハット・シンバル、小太鼓、フレクサトーン、カウベル、ボンゴ、ラチェット、ヴィブラスラップ、サスペンデッド・シンバル、トムトム、トライアングル、タンブリン、カバサ、クワイカ、ウッド・ブロック、ハープ1、ピアノ1、弦楽

PROGRAM

C

第1937回

NHKホール

4/17 金 7:00pm

4/18 土 3:00pm

指揮 | レナード・スラットキン | 指揮者プロフィールはp.15

語り | 石丸幹二★

イングリッシュ・ホルン | 和久井 仁□

トランペット | 菊本和昭□

コンサートマスター | 白井 圭

コーブランド生誕120年・没後30年

コーブランド

バレエ音楽「ロデオ」から

4つのダンス・エピソード〔18'〕

- I カウボーイの休日
- II 牛小屋のノクターン
- III 土曜の夜のワルツ
- IV ホー・ダウン

コーブランド

静かな町□〔10'〕

コーブランド

リンカーンの肖像★〔14'〕

テキスト翻訳: 広田敦郎

——休憩(20分)——

コーブランド

バレエ音楽「アパラチアの春」〔38'〕

Artist Profile

石丸幹二 (語り)



1965年愛媛県出身。幼少よりピアノ、トロンボーン、チェロなどさまざまな楽器に親しみ、東京音楽大学でサクソフォン、東京藝術大学で声楽を学ぶ。1990年から2007年の間は、劇団四季にて、ミュージカル『オペラ座の怪人』『ウエストサイド物語』『美女と野獣』『壁抜け男』などに出演する。同団退団後も日本ミュージカル界を牽引する俳優として、『ラブ・ネバー・ダイ』『ジキル&ハイド』『パレード』などの主演を務める。映像分野で

は、NHK大河ドラマ『花燃ゆ』などのテレビドラマに出演するほか、音楽活動も積極的に展開し、これまでにソロ・アルバムのほか、リュート奏者のつのだたかしと『武満徹のうた』などをリリースしている。クラシック音楽の分野ではストラヴィンスキー《兵士の物語》やグリーグ《ペール・ギュント》など、「朗読」を介しての関わりが多いほか、2017年より音楽番組の司会を務めている。

NHK交響楽団とは今回が初共演となる。

Program Notes | 沼野雄司

アーロン・コーブランド(1900~1990)の作品にはさまざまな貌がある。生真面目な器楽、左翼的なプロパガンダ作品、叙情的な歌曲、晩年の十二音音楽など……。しかし人気が高いのは《エル・サロン・メヒコ》(1936)あたりから始まる中期作品だろう。まさにこの時期、40代にさしかかった作曲家は、若き日にフランスで学んだ技術をアメリカの風土と結びつけることに成功したのだった。

いずれもがコーブランドの代表作といえる本日の4曲は、中期の真ただ中、1939年から1944年にいたる5年の間に——すなわちびたりと第2次世界大戦の時期に——書かれている。これはおそらく偶然ではないだろう。以下に記すように、戦争という特殊な状況と作曲家の成熟が重なった結果として、これらの果実が産みだされたようにも思えるのである。

コーブランド

バレエ音楽「ロデオ」から4つのダンス・エピソード

《春の祭典》に代表される斬新な作品でヨーロッパを席捲したバレエ・リュス(ロシア・バレエ団)は、主宰者ディアギレフの死とともに、1929年、その歴史を閉じる。ほどなくして設立された後継団体は、しかし活動方針をめぐって分裂。このうち、フランス人振付家のルネ・ブルムを中心にした一群は「バレエ・リュス・ド・モンテカルロ」の名を名乗ることになった。

この団体はアメリカを主な公演地としており、「アメリカ人作曲家による、アメリカを題材にした、アメリカのバレエ」を当初から強く求めていた。ましてや、時はおりしも戦時中。ナショナリズムの高揚はすさまじく、彼らとしてもアメリカ的な作品の創出は必至だったわけだ。こうした中、バレエ《ブリー・ザ・キッド》を観た振付師アグネス・デ・ミルは、コーブランドに白羽の矢を立てた。かくして作曲家は、さまざまなアメリカの民謡素材を投入しながら、期待に応えて「アメリカ的な」バレエ音楽を完成させることになる。《4つのダンス・エピソード》は、初演ののちに作られた抜粋版。

4曲が、アレグロ—夜想曲—舞曲—アレグロという並びを取ることも分かるように、ここで作曲者は明らかに交響曲的なフォームを思い描いている。いわばガッチリとした

構成と、バレエに由来する情景描写が衝突するあたりが、この曲独特の面白さなのだ。

第1曲〈カウボーイの休日〉は、冒頭から金管の咆哮^{ほうこう}が耳を楽しませるが、スコアを見て驚くのは、多彩なリズムの変化が随所で感じられるにも関わらず、ほぼ2/2拍子のみで記譜されていること(わずかに2箇所、計2小節だけ3拍子が用いられている)。中間部ではファゴットとホルンの伴奏の上で「ユーモアを持って」と記されたトロンボーンのソロ、続いてトランペットのソロが現れる。第2曲〈牛小屋のノクターン〉は、緩徐楽章の役割。弦楽器の透明な響き、隠し味のように寄り添うチェレスタが効果的だ。第3曲〈土曜日の夜のワルツ〉はノン・レガートの弦楽器群を背景にして、オーボエのどこか懐かしい旋律があらわれる(なお、スラットキンは以前の録音では第3曲の直前に酒場風のピアノによる部分を挿入している)。そして、やはりさまざまな民謡が引用される第4曲〈ホー・ダウン(踊り)〉では、一気に全管弦楽が稼働して、酒を飲んだカウボーイたちの馬鹿騒ぎをダイナミックに描きだす。

作曲年代	1942年
初演	[バレエ全曲版] 1942年10月16日メトロポリタン歌劇場、フランク・アラース指揮による [抜粋版] 1943年5月28日、アーサー・フィードラー指揮、ボストン・ポップスによる
楽器編成	フルート3(ピッコロ2)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、ハープ1、ピアノ1(チェレスタ1)、シロフォン、グロッケンシュピール、小太鼓、ウッド・ブロック、トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、ムチ、大太鼓、弦楽

コーブランド

静かな町

わずか10分ほどの小曲だが、コーブランドの内省的、叙情的な側面がいかに開陳されたユニークな音楽である。

もとはアーウィン・ショーによる戯曲の付随音楽として書かれたが、1939年の舞台初演(演出をエリア・カザンが務めた)は、まったくの不評でわずか2回で打ち切られてしまった。大都会ニューヨークを背景にして、詩人になる夢を捨ててビジネスマンとなった兄と、貧しいトランペット吹きの弟が登場する、どこか観念的な物語は、当時のアメリカでは受け入れられなかったのだろう。翌年コーブランドは、四重奏編成(クラリネット、サクソフォーン、トランペット、ピアノ)を、イングリッシュ・ホルン、トランペット、弦楽合奏へと拡大して、独立した楽曲に仕立て直すことになった。

音楽は全体としてABCBAという鏡像的な構成をとり、都会の孤独を描いた原作を反映して、終始、抑制された響きを奏でる。冒頭、弦楽器の静かな和音から、ふわりとトランペットが浮かび上がると、やがてイングリッシュ・ホルンが旋律を分担し、静かな対話に発展。中間部では、弦楽器が逆付点のリズムを刻んだのち小さなクライマックスに到達するが、徐々に荒涼とした音風景が回帰する。

作曲年代	[演劇版]1939年 [弦楽合奏版]1941年
初演	[弦楽合奏版]1941年1月28日、ニューヨークにて、ダニエル・サイデンバーク指揮、サイデンバーク・リトル・シンフォニーによる
楽器編成	弦楽、イングリッシュ・ホルン・ソロ、トランペット・ソロ

コーブランド

リンカーンの肖像

真珠湾攻撃の翌日1941年12月8日(現地時間)、アメリカは日本に宣戦布告し、ついに世界大戦に参戦した。以後、戦意高揚のための音楽が無数に書かれることになるが、本作もそのひとつ。指揮者のコステラネッツが、アメリカの偉人を題材にした音楽を委嘱した結果、生まれた作品である。

曲をなによりも特徴づけているのは、後半で延々と導入されるナレーションだが、初演以来、アメリカではさまざまな著名人がこの役を担当するのが慣例になっている。一例をあげるならば、コーブランド自身、詩人サンドバーグ、宇宙飛行士アームストロング、政治家ではクリントン、オバマといった人々、そしてトム・ハンクス、キャサリン・ヘップバーン、ポール・ニューマンといった人気俳優など、錚々たるメンバーがナレーターに名を連ねてきた。

楽曲は基本的に簡素な作りであり、作曲のペースがきわめて早かったのも納得できよう。最初にあらわれるのは、荘重かつ神秘的な序章。リンカーンの宿命、そして温厚な人柄が、延々と積み重なる複付点のリズムによって象徴される。やがてテンポが速くなると新しい部分。ここではフォスターの《草競馬》などが引用されて、リンカーンの生きた南北戦争時代が描かれる。このあと、ついにナレーションが導入され、以後、オーケストラは「額縁の役割」を果たすことになる。リンカーンの演説は、1858年から1863年の「ゲティスバーグ演説」にいたる複数が繋ぎ合わされたものだが、「彼はケンタッキー州に生まれ……」といった第3者の視点も含まれるのが面白い。そして最後に「人民の人民による人民のための政治を地上から消滅させないことを……」との有名な台詞にたどり着き、全曲を輝かしく閉じる。

作曲年代	1942年
初演	1942年5月14日、アンドレ・コステラネッツ指揮、シンシナティ交響楽団による
楽器編成	フルート2(ピッコロ2)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、グロッケンシュピール、シロフォン、シンバル、サスペンデッド・シンバル、スレイベル、小太鼓、タムタム、大太鼓、ハープ1、チェレスタ1、弦楽、語り

バレエ音楽「アパラチアの春」

モダン・ダンスの創始者マーサ・グレアム(1894~1991)のために、戦争末期の1944年に書かれたバレエ曲である(グレアム自身が踊っている舞台を、現在YouTubeで観ることができる)。作曲者によれば、ここで描かれているのは19世紀初頭のペンシルヴェニアで若い夫婦が農家を新築した際の風景。

興味深いのは、後半部でシェイカー教徒の聖歌《シンプルギフト》が引用されていることだ(聖歌の作曲はエルダー・ブラケット)。都市文明から背を向け、自給自足に近いかたちで宗教生活を送るシェイカー教徒の生活は、戦時中のアメリカ人にとっては国の原点を思い起こさせるものだったろう。大恐慌と戦争という経験を経たからこそ「つつましくあることが神からの贈り物である」というメッセージが人々に共感をもって受け入れられることになったわけだ。ちなみにバレエ初演の舞台美術を務めたのは日系彫刻家のイサム・ノグチで、制作にあたってはシェイカー教徒の手作り家具が大いに参考になったという。

オリジナルのバレエ版は13人の奏者のために書かれていたが、その後、オーケストラによる組曲版が1945年に、さらにオーケストラによるバレエ全曲版が1954年に作成された。本日演奏されるのは、この全曲版である。

音楽は遠いエコーのようなクラリネットの呼びかけで始まる。ほどなくアレグロに転じて華やかな気分が溢れだすが、弦楽器による細かい上下行の間を金管楽器がポリリズムに行進する部分の音響アイデアは秀逸。木管の細かいパッセージが重なりだすと、どこか不器用で垢ぬけない、素朴なダンスが始まる。やがて音楽は、活発な移行部に到達したのちに、いったんはほぼ歩みを止める。ここまでがおおよそ20分ほど。そして、ついにクラリネットではっきりと《シンプルギフト》の旋律が示され、5つの変奏がはじまる。同時に、聴いている我々にも、つつましい幸福が訪れることになるのである。

作曲年代	[バレエ]1944年 [組曲版]1945年 [全曲版]1954年
初演	[バレエ]1944年10月30日、ワシントンDCの議会図書館にて、ルイス・ホースト指揮による [組曲版]1945年10月4日、アルトゥール・ロジンスキ指揮、ニューヨーク・フィルハーモニックによる
楽器編成	フルート2(ピッコロ1)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ1、大太鼓、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、中太鼓、ティパー、トライアングル、グロッケンシュピール、シロフォン、ウッド・ブロック、クラベス、サンドペーパー・ブロック、ハープ1、ピアノ1、弦楽

N響百年史

第十二回 近衛秀麿登場

片山杜秀 — Moritide Katayama

二〇二六年のN響創立百周年に向け、NHK-FM「クラシックの迷宮」のパーソナリティとしても馴染みの思想史研究者で音楽評論家の片山杜秀さんが、N響の歴史を時代背景とともに、独自の視点からひもときます。今シーズンには職業オーケストラの黎明期から山田耕筰、近衛秀麿の登場、N響の前身である新交響楽団の誕生までを描く予定です。パトロン岩崎小彌太が手を引き、東京フィルハーモニー会は解散。失意に沈む山田耕筰のもとを訪れた二人の青年とは――。

山田耕筰と近衛秀麿の出会い

第1次世界大戦が3年目を迎えていた1916（大正5）年の春のこと。学習院中等学科（現・中等科）の5年生だった満17歳の若者が、山田耕筰の門をたたいた。名を近衛秀麿という。

耕筰が夢を託した、日本初の民間市中のプロ・オーケストラといってよい東京フィルハーモニー会管弦楽部は、同年2月に潰えたばかり。演奏活動が軌道に乗るか乗らないかという瀬戸際で、実質的運営者である三菱財閥の岩崎小彌太が手を引いてしまい、解散に至った。そのとき、楽団員の給与や経費の未払い分は3000円を下らなかったらしい（現在の3000万円相当か）。請求は最高指揮官の小彌太には行かず、現場責任者の耕筰に集中する。やや不思議にも思える話だが、耕筰が矢面に立って解決するように、小彌太と耕筰の間に密約ができていたのかとも推測される。小彌太には会社の手前、もう正面切って楽団に関われぬ事情があったのだろう。耕筰ひとりが借金取りに追い回される。が、なぜか比較的早めに清算できたようである。小彌太が、東京フィルハーモニー会解散後も、会社には内密に、裏でおも耕筰を助けていたらしいことは、小彌太の死後、三菱グループ内に設けられた編纂委員会の刊行した『岩崎小彌太傳』（1957）の示唆するところでもある。秘められたお金の出どころがいろいろあったのだろう。

そんな借金返済時代の山田耕筰は、尾羽打ち枯らして赤坂で暮らし、やがて隣の青山に引っ越す。中学生の近衛秀麿が耕筰のもとに現れ、頻繁に出入りするようになったのは、この時期だった。

五摂家の筆頭

近衛家は華族にして、いちばん上の^{しやくい}爵位の^{こうしやく}公爵家である。名門中の名門の公家だ。公家の中に五摂家という特別な家柄があった。摂政や^{ごせつ}関白、^{だじよう}太政大臣を出せる5つの家が五摂家。近衛、九条、二条、一条、^{たかつかさ}鷹司である。近衛は五摂家の筆頭。平たくいって、公家の中でいちばん偉い。五摂家といっても、元をた^{そろ}だせば同じく揃って、大化の改新でおなじみの^{ふじわらのかまたり}藤原鎌足の子孫の藤原一族であり、しかも藤原氏の中でも、平安の世に栄華を極めた藤原道長の家系に連なっている。そもそも公家の歴史とは、姓が藤原ばかりになる歴史である。それでは混乱を招くばかり。そこで、京の都のどこに邸宅を構えているかで名乗り分けるようになっていった。九条通沿いに住む藤原は九条と呼ばれ、一条通沿いに住む藤原は一条と呼ばれる。本姓は藤原だが、便宜的に住所を姓にする。近衛家の場合は、御所を守る近衛府の北に住していた時期があったので、近衛になった。

近衛家の祖は、藤原(近衛)^{もとざね}基実である。基実の父は藤原^{ただみち}忠通。そこからさらに父をたど^{さかのぼ}て遡ると、忠実、師通、師実、頼通となって、頼通の父が藤原道長。道長を入れて数えて七代目に^{もと}して、近衛家が始まるわけだ。近衛の初代、基実^みは、平清盛の四女を正室とし、摂政、関白、左大臣を歴任した。基実の後を継いだ子の^{もと}基通は、やはり平清盛の六女を正室とした。近衛家の始まりは源平時代とかぶっていた。平家が源氏に追われて都落ちするとき、基通は、清盛の娘^{めと}を娶る平家派筆頭格の公家として、平家の奉ずる^ふ安徳天皇と行動を共にするように、平家から求められた。が、基通は拒んで都に残った。

正室^{さだこ}の完子は夫に従わず、平家一門と一緒に落ち、^{だん}壇ノ浦で入水しそこなって捕えられ、京に戻ってくるが、反平家の後白河法皇と後鳥羽天皇に近しく仕える身となっていた夫の基通と、再会した記録はないかと思われる。高位の公家とは、そうやって生き残っていくものであろう。

といっても、近衛家の血筋は、男系としては1回、途切れている。17代当主、近衛^{のぶた}信尹には嫡子がなかった。そこで女系に頼る。信尹には妹がいた。近衛^{さきこ}前子である。後陽成天皇の女御^{にようご}になって、後の後水尾天皇を含む、何人かの皇子を産んでいた。その中から、関ヶ原の合戦の前年(1599年)に生まれた第4皇子を、信尹の養子してもらい受けた。後の18代当主、近衛^{のぶひろ}信尋である。後水尾天皇の弟だ。つまり近衛家は、徳川幕府成立の頃、いったん男系が絶え、女系ではつながっているが、男系としては皇室から血を入れ直してもらっている。近衛秀麿の顔つきに、何らかのやんごとなさを感じられるとすれば、藤原氏以来の古い家柄というだけでなく、後陽成天皇直系の血筋ということも思い出すべきかもしれない。

アジア主義者だった父・篤麿

閑話休題。男系の血の入れ替わった、五摂家筆頭の近衛家も、やがて激動の幕末を迎える。その頃の当主は27代目の近衛^{ただひろ}忠熙。彼は水戸の徳川^{なりあき}斉昭の熱烈な^{そのうじようい}尊皇攘夷論^{くみ}に与し、斉昭の子の^{よしのぶ}慶喜の^{ようりつ}將軍擁立に協力して、幕府大老、井伊直弼に逆襲され、一敗地に塗れた。忠熙の子、近衛^{ただふさ}忠房は薩摩の島津家から妻を迎え、幕末の政争では薩摩の意を汲みながら朝廷で行動した。薩摩が徳川慶喜と結べばそれを支持し、薩摩が長州と同盟すれば、それを

また支持した。そうして明治維新を迎える。忠房にもさまざまな地位が廻ってくるかと思われた。ところが家督を継ぐ前に、1873(明治6)年、まだ30代で世を去る。

五摂家の筆頭として、王政復古の明治新政に役割を担うことを期待された近衛家である。忠房の若き死は無念であった。しかし、老当主の近衛忠熙が改めて中央の政治に顔を出すわけにもゆかない。期待は忠房の嫡男、1863(文久3)年生まれ近衛篤麿にかかった。篤麿は、祖父の忠熙の思想を受け継いだところがある。つまり、幕末の尊皇攘夷の続きをやるための時代として明治を考えた。西洋文明の仲間入りを果たすことが真の維新の目標であろうか。そうではあるまい。西洋文明に対抗し、それを克服していくのが明治維新の初心。中国を味方にし、東亜独自の文明を築かねばならない。近衛篤麿の信念であった。彼はいわゆるアジア主義者だ。西洋列強に仲間入りできればそれでよしとする明治の政治の本流とは、明らかに一線を画していた。

明治憲法体制は、貴族院と衆議院の二院制をとる。近衛家28代目の近衛篤麿公爵は、貴族院を根城にして国事に奔走し、貴族院議長となった。明治の代表的な議会政治家のひとりといってよい。清朝の親日勢力と連携を密にし、対露強硬論を唱え、日露戦争に向かってゆくひとつの道筋を作った。近衛篤麿にとっての日露戦争のイメージは、単なる国家間の勢力争いというよりも、アジアとヨーロッパという異質な文明同士の生き残りをかけた決戦の序幕であった。しかるに篤麿は、日露戦争の始まりを観ず、1904(明治37)年の元日に40歳で逝く。原因は、1901年の中国への長期旅行でもらってきたともいわれる病菌による難病である。1903年1月には肺炎に至り、その後、

平癒したかと思えばぶりかえし、日露問題で多忙を極め、無理を重ねるうち、命を失った。中国に思い入れたアジア主義者のひとつの死にざまである。日露開戦は翌月の8日だ。

華族の音楽愛好家、誕生

近衛篤麿は4人の男子を残した。長男の文麿は1891(明治24)年、次男の秀麿は1898年。三男の直麿は1900年、四男の忠麿は1902年の生まれ。篤麿が世を去ったとき、文麿が12歳で秀麿は5歳。秀麿以下はあまりに幼かった。将来父の後を継ぎ、貴族院政治家としての活躍を期待され、そのように教育を施されていったのは、嫡男の文麿である。忠房に篤麿。いずれも活躍の足りぬうち、人生を終えてしまった。挽回の希望は文麿に託される。

次男以下も、兄の文麿に負けずに、天下国家に志を抱いてもよいのだが、兄弟が同じ道に行こうとすれば厄介ごととも起きやすい。政治は文麿に任せるのが吉だ。とすると、弟には軍人の道も考えられる。天皇の軍隊で将軍や提督となる。華族の選択として悪くない。が、お公家さんの血筋だ。武家ではない。公卿の家のやることは、政治でなければ、軍事よりも詩歌や音楽、芸事であろう。近衛家は雅楽とも歴史的に縁が深い。男子が音楽に親しむことを退ける家風は、古代から一貫してない。文麿も少年時代から西洋古典音楽愛好者であった。弟の秀麿は学習院の初等科時代からヴァイオリンを嗜んだようである。兄の文麿の理解もあった。学習院の中等科に進むと趣味が高じていった。ヴァイオリンのレッスンも1913(大正2)年の頃から本格化させたようである。近衛邸に末吉雄二が師として招かれ、個人レッスンを受けた。兄が政治、弟が音楽。いかに

も近衛家らしい棲み分けの路線はすでに敷かれ始めていた。

秀麿は上野の東京音楽学校にも出入りするようになった。でもヴァイオリニストを目指したわけではないようである。彼の興味は作曲に向かっていた。しかもピアノ曲や歌曲では満足できない。オーケストラの音楽を書きたい。第1次世界大戦下の日本で、岩崎小彌太が山田耕筰を登用し、東京フィルハーモニー会でオーケストラを育てようとし始めるのは1914(大正3)年なのだから、近衛のオーケストラ熱の昂^{たか}ぶりは、それと関係あるだろう。けれども、近衛の回想等に、山田耕筰の指揮する東京フィルハーモニー会管弦楽部を聴いた記述はおそらくない。行こうとして行けなかったという話さえない。

コンサートの少ない時代なのだ。音楽界もとても狭いし、話題も少ない。東京の余裕ある音楽ファン、しかもオーケストラ愛好家で作曲に心惹かれる若者が、ドイツ帰りの指揮もする作曲家、山田耕筰の動向、そして新オーケストラの結成に、関心を向けないはずはない。それなのにどうして？ 岩崎小彌太の東京フィルハーモニー会が、華族主体で明治のうちからそれなりに開かれてきた西洋古典音楽演奏会への、ブルジョワジーからの挑戦状としての側面を持っていたことを、秀麿が過剰に意識していたのかもしれない。だが、おそらくそこはポイントではあるまい。東京フィルハーモニー会の演奏会には皇族も出かけていたのだから。近衛秀麿も実は通っていた、ないしは通いかけたが何らかの事情があって行けなかったと考えるのが、自然と思う。そのことに、後年わざと

触れないようにしたのではないか。もしもそのような空想が許されるとすれば、理由は何だろうか。山田耕筰が率い、短期で終わったプロ・オーケストラの歴史は、なかったことにしておきたい。なぜなら、語るに足るプロ・オーケストラの歴史とは、山田耕筰と近衛秀麿の提携で始まり、ついに近衛の独壇場で花開いたからだ。それが「正史」だ。日本における本格的な指揮者の歴史も、山田耕筰でなく近衛秀麿から始まるのだ。そう、秀麿が強く意識していたからではないのか。

1916(大正5)年の春、中学生の近衛秀麿は、指揮者として大きな挫折を味わったばかりの山田耕筰に弟子入りする。指揮でなく、作曲と理論の弟子のつもりである。秀麿は作曲家耕筰を日本で唯一オーケストラ音楽を作れる人として大いに認めている。が、指揮者耕筰は最後まで認めていなかったかと思われる。一方、山田耕筰は、大金持ちの大華族の子弟が弟子になってくれたことに、狂喜しただろう。捨てるブルジョワあれば拾う華族あり。

とにかく、その日から耕筰と秀麿の共闘が始まる。後はいよいよNHK交響楽団の誕生に向かう一本道である。まだ凸凹はあるけれど。

文 | 片山杜秀(かたやま もりひで)

思想史研究者、音楽評論家。慶應義塾大学法学部教授。2008年、『音盤考現学』『音盤博物誌』で吉田秀和賞、サントリー学芸賞を受賞。『クラシックの核心』『ゴジラと日の丸』『近代日本の右翼思想』『未完のファシズム』『見果てぬ日本』ほか著書多数。

次回予告

次回からは山田耕筰と近衛秀麿の海外武者修行を描きます。山田がアメリカで、近衛がヨーロッパで得たものとは何だったのでしょうか――。

Overview

5月定期公演

首席指揮者パーヴォがシーズン最後の登場
新シーズンへの期待も高まる多彩なプログラム

5月の定期公演は首席指揮者パーヴォ・ヤルヴィが3つのプログラムを指揮する。

Aプロは生前に親交を結んだふたりの作曲家、ブリテンとショスタコーヴィチに焦点が当てられる。ブリテンの《シンフォニア・ダ・レクイエム》は日本政府から皇紀2600年奉祝曲として依頼されながらも演奏を見送られたいわく付きの作

品。ショスタコーヴィチの《交響曲第9番》は「第九」ゆえに記念碑的大曲を期待されたものの、その軽妙さから当局より批判を受けた問題作だ。ブリテンの《ヴァイオリン協奏曲》では、録音でも同曲をパーヴォと共演した名手ジャニーヌ・ヤンセンがソロを務める。

Bプロはリヒャルト・シュトラウスの2曲が並ぶ。《バレエ音楽「ヨセフの伝説」》から〈交響的断章〉を聴く機会は貴重だ。《アルプス交響曲》は緻密なオーケストレーションから絢爛たる響きが生み出される作品。パーヴォとN響ならではの解像度の高いサウンドを堪能したい。

Cプロは多彩だ。ジャズの語法をとりいれたガーシュウインの《ピアノ協奏曲》では、ジャン・イヴ・ティボーデが独奏に招かれる。一方、プーランクの《グロリア》は敬虔かつ斬新な宗教音楽。森麻季のソプラノ、新国立劇場合唱団が清澄な歌唱を聴かせてくれることだろう。

[飯尾洋一／音楽ジャーナリスト]

A

5/9(土) 6:00pm

5/10(日) 3:00pm

NHKホール

ブリテン／シンフォニア・ダ・レクイエム 作品20
ブリテン／ヴァイオリン協奏曲 作品15
ショスタコーヴィチ／交響曲 第9番 変ホ長調 作品70

指揮：パーヴォ・ヤルヴィ
ヴァイオリン：ジャニーヌ・ヤンセン

B

5/20(水) 7:00pm

5/21(木) 7:00pm

サントリーホール

R. シュトラウス／バレエ音楽「ヨセフの伝説」から交響的断章
R. シュトラウス／アルプス交響曲 作品64

指揮：パーヴォ・ヤルヴィ

C

5/15(金) 7:00pm

5/16(土) 3:00pm

NHKホール

モーツァルト／交響曲 第31番 二長調 K. 297「ナリ」
ガーシュウイン／ピアノ協奏曲 ヘ調
プーランク／グロリア*

指揮：パーヴォ・ヤルヴィ
ピアノ：ジャン・イヴ・ティボーデ
ソプラノ：森 麻季*
合唱：新国立劇場合唱団*

ケント・ナガノ&N響が贈る

ヴィトマン《オラトリオ「箱舟」》 その魅力に迫るVOL. 03 多種多様な様式で紡がれる音響世界

日本
初演

Widmann
“Arche,” oratorio

2020年7月、N響とケント・ナガノが300人を超える演奏者と共に日本初演を果たすヴィトマンの《オラトリオ「箱舟」》。世界中から注目される作曲家ヴィトマンが作り出す個性豊かな音響世界を、現代音楽の研究者である白石美雪さんが紐解きます。



© Marco Boggione

イェルク・ヴィトマン

1973年ミュンヘン生まれの作曲家、指揮者、クラリネット奏者。11歳から作曲を学び始め、ハンス・ウェルナー・ヘンツェやヴォルフガング・リームらに師事。ザルツブルク音楽祭、クリーヴランド管弦楽団などのコンポーザー・イン・レジデンスを務めた。近年の代表作には《ヴィオラ協奏曲》《葬送行進曲》《歌劇「バビロン」》などがある。現在はフライブルク音楽大学作曲科教授、バレンボイム・サイド・アカデミー教授、アイルランド室内管弦楽団首席指揮者を務める。

クラリネット奏者から新進作曲家へ

クラリネットのヴィルトゥオーゾとして国際的に活躍してきたイェルク・ヴィトマンが新進作曲家として頭角を現したのは20年ほど前だろうか。日本では2005年にアンサンブル・モデルンの演奏会で《フライエ・シュトゥッケ》が、2010年に杉山洋一指揮東京都交響楽団の演奏で《コン・プリオ》が日本初演となった。三和音もノイズもベートーヴェンも、まったく等距離のものとして扱う彼のすこぶる楽観的な姿勢が新鮮に感じられたのを覚えている。2018年にはサントリーホール サマーフェスティバルのテーマ作曲家として室内楽と管弦楽曲が紹介されるなど、少しずつ日本でもヴィトマンの曲を聴くチャンスが増えてきた。いまや数多の委嘱が舞い込み、続々と初演のニュースが届く中堅作曲家である。ここ10年は《歌劇「バビロン」》や《オラトリオ「箱舟」》など、大規模な作品が多い。

顕著なのはいつも古典を参照することだ。「シューマンやウェーバー、ベルクといった作曲家たちは、何世紀にもわたる同時代人」(「細川俊夫氏の問いに答えて」2018年より)と語る彼は、過去の作曲家たちの音楽を生きたものとして呼吸する。とくにクラリネット奏者として触れてきたロマン派音楽の数々はまさに血肉と化している。だから「引用」の形で過去を回想するのではなく、過去の様式そのものを現

在形として用いるのだ。そこへウォルフガング・リームやハンス・ウェルナー・ヘンツェらに学んで吸収した現代の響きが絡んで、個性豊かな音響世界が生まれる。《箱舟》はその典型である。

《箱舟》で生き生きと表現される物語

ヴィトマンは器楽曲でも物語性のある音楽を志向してきたが、《箱舟》ではアリアや重唱、合唱の歌詞と子供の朗読によって、ストーリーが明確に伝えられる。そこへ多様なスタイルの器楽が寄り添い、ときに溶け合い、ときに衝突することによって、物語がダイナミックに生き生きと表現されるのだ。5楽章からなるアーチ型の構成で、第1楽章と第2楽章は『旧約聖書』の「創世記」から、第4楽章と第5楽章はミサ典礼文からの言葉が軸となり、第3楽章には世俗的な愛の喜びと嫉妬をめぐるテキストが使われている。

音楽の特徴を概観しよう。第1楽章〈ヒカリアレ／光あれ〉は天地創造を描く。冒頭は弱音のタムタムに続き、静寂の中でアコーディオン、クラリネット、フルートが空気の音を鳴らし、闇が身じろぐ感触をもたらす。続く合唱によるドイツ語の「光あれ!」の部分では、低音から高音へと倍音列をたどる音型が立ち上がったのち、合唱とグラスハーモニカ、ハープがいっしょになって輝く瞬間を演出する。こうした視覚的、あるいは触覚的な表現が織りなすテクスチュアのさなか、バリトンの独唱が2回、挿入される。最初は速いワルツのテンポで、ドイツの詩人ハインリヒ・ハイネ(1797-1856)の『新詩集』の歌詞によるウィットに富んだカンツォーネ。もう1回はやはりドイツの詩人クラブント(1890-1928)の『熱き心』の一節を歌詞とするロマン派風の歌曲。異なる様式へと瞬時にワープすることで、目の前で起こりつつある神のみわざに注釈を加える。楽章の終わりは『死と乙女』でも有名な詩人マティアス・クラウディス(1740-1815)の『人間』の歌詞による穏やかなコラルとなる。

第2楽章〈洪水〉は動物の鳴き声が模倣され、破滅的な響きで洪水の恐怖が伝えられる傍ら、「ペトロの手紙」や「イザヤ書」、「詩編」を用いながら神に見放された人間の悲しみを滲ませた合唱が続く。心情を吐露する調性もしくは旋法による楽想が第1楽章よりも細切れに挿入され、ときにアイヴズの音楽のごとく、多層的に重ねられる。クレメンス・ブレンターノ(1778-1842)の『1817年8月25日』とクラウディスの『夕べの歌』を歌詞としたバリトンの独唱はロマン派の歌曲のスタイルで、聴いていて安らかになる。鳩の飛行を伝えるソプラノ独唱には高音域を生かしたモチーフで楽器音が重ねられ、希望の光をイメージさせる。

第3楽章〈愛〉はじつにオペラティックだ。ソプラノの妖艶なヴォカリーズで始まり、ソプラノとバリトンが対話するように進んでいく。一種のレチタティーヴォに室内乐的な楽想を添えられ、合唱はテンポよく雅歌を歌う。緊張が走るのはクラブントの『嫉妬』の言葉を用いた二重唱とクルト・ワイル風のバリトン独唱。女の叫び声まで入れて刺殺を表現する。続くソプラノのアリアが耽美的で浄化されるようだ。終わり近くに置かれた、デンマークの童話作家ハンス・クリスチャン・アンデルセン(1805-1875)の『露見した恋』による独唱、重唱、合唱は、民謡に基づく歌曲のように親しみやすい。愛の純粹さ、温かさから男女のしたたかさ、嫉妬、殺意まで、角度を変え、音楽の様式を変えて、「愛」に切り込

むのである。

低音域で揺れる音型で始まる第4楽章〈怒りの日〉は、太鼓類が炸裂するなか、〈ディエス・イレ(怒りの日)〉と〈トゥーバ・ミルム(不思議なラッパの音)〉という典礼文がアップテンポで歌われる。〈レクス・トレメンデ(みいつの大王)〉でふいに付点リズムが導入され、ゆったりとした叙情的な音楽に転換する。この楽章で特筆されるのはフリードリヒ・フォン・シラー(1759-1805)の詩に付けられたベートーヴェンの《第9》の変奏。高らかな歌声に束の間、ユートピアが現出する。間髪おかずに始まる第5楽章〈ドナ・ノービス・パーチェム(我らに平和を与えたまえ)〉の冒頭の歌詞ではアルファベットのaから始まる現代の言葉を少年たちが勢いよく羅列する。フィナーレは人間の自立を夢見る少年の歌に続いて、「我らに平和を与えたまえ」というラテン語の典礼文によるカノンで大団円となる。

どこか懐かしく、めくるめく音響世界

多種多様な様式——描写的表現とオペラのレチタティーヴォやアリア、ロマン派歌曲、コラル、「歓喜に寄す」、ラップなど——を繰り出し、歌とピアノのデュオからトゥッティまで、編成を自在に増減させるヴァイトマンの音楽は、未知でありながら懐かしい。めくるめく変化をみせながら、テンポよく進む物語の展開に、100分という演奏時間は短く感じられるはずだ。

[白石美雪／武蔵野美術大学教授、音楽学]

次回予告	5月号では、《箱舟》で歌われる歌詞の世界に迫ります
------	---------------------------

2020年7月4日[土] 5:00pm | サントリーホール

ヴァイトマン／オラトリオ「箱舟」(2016) [日本初演]

2020 July 4 (Sat) 5:00pm, Suntory Hall
Widmann "Arche," oratorio (2016)
[Japan Première]

指揮：ケント・ナガノ

Kent Nagano, conductor

ソプラノ：マルリス・ペーターゼン

Marlis Petersen, soprano

バリトン：トーマス・E. バウアー

Thomas E. Bauer, baritone

合唱：新国立劇場合唱団、アウディ・ユージェント合唱団

New National Theatre Chorus,

語り(子役)：斎藤来奏、三宅希空

Audi Jugendchorakademie, chorus

児童合唱：NHK東京児童合唱団

Rukana Saito, Noa Miyake, narrator

NHK Tokyo Children Chorus, children's chorus

チケット料金 (発売中)	一般：S席15,000円 A席12,000円 B席10,000円 C席8,000円 D席6,000円 ユースチケット(25歳以下)：S席6,000円 A席5,000円 B席4,000円 C席3,000円 D席2,000円
-----------------	---

PROGRAM

A

Concert No.1936 **NHK Hall****April****11 (Sat) 6:00pm****12 (Sun) 3:00pm**conductor | **Leonard Slatkin**saxophone | **Branford Marsalis**concertmaster | **Ryotaro Ito**

Toshio Hosokawa
Meditation–To the Victims of
Tsunami 3. 11– (2012) [14']

John Adams
Saxophone Concerto (2013) [32']

- I Animato
- II Molto vivo

— intermission (20 minutes) —

Vaughan Williams
Symphony No. 5 D Major [39']

- I Preludio: Moderato
- II Scherzo: Presto misterioso
- III Romanza: Lento
- IV Passacaglia: Moderato

A

11 & 12, APR. 2020

Artist Profiles

Leonard Slatkin, conductor

Leonard Slatkin is an American conductor born in Los Angeles. He is now Music Director Laureate of the Detroit Symphony Orchestra and Honorary Music Director of the Orchestre National de Lyon. His parents were violinist and cellist respectively of the Hollywood String Quartet, and his father Felix was also a conductor leading the Hollywood Bowl Orchestra, therefore he is the second generation of conductor after his father. He studied at the Juilliard School and made his conducting debut in 1966, and as soon as he assumed the position of Music Director of the St. Louis Symphony Orchestra in 1979, he raised the orchestra to top-class quality and popularity in the U.S. for which he gained reputation. After that, he served as Music Director of the National Symphony Orchestra in Washington D.C. (1996–2008) and Chief Conductor of the

BBC Symphony Orchestra (2000–2004), while making guest-appearances in prestigious orchestras of the world. His first appearance with the NHK Symphony Orchestra was in 1984 when he conducted its subscription concert, and since then, he has returned to the podium every few years in 1988, 1993, 1996, 2000, 2008, 2012 (January & September) and 2016 and has built up a close relationship.

Branford Marsalis, saxophone



Born to a family of jazz musicians in New Orleans, Branford Marsalis was selected as a band member by Miles Davis and Sting while he was still in his twenties. He is a jazz saxophonist who, along with his brother Wynton, has led the jazz scene from the 1980s to present, and won the Best Instrumental Jazz Performance for the album *Contemporary Jazz* in the 2001 Grammy Awards. He is

also keen on classical saxophone performances, and released albums of classical music in 1986, 2001 and 2009. His classical performances in recent years include works by Alexander Glazunov and Erwin Schulhoff with the New York Philharmonic under Andrey Boreyko in 2010 and 2011, a work by John Adams with the Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra under Edwin Outwater in 2015, works by Darius Milhaud and Jacob Ter Veldhuis with the Bayerische Staatsorchester under Kristjan Järvi in 2016, and by Fauré and John Williams with the Chicago Symphony Orchestra conducted by Susanna Mälkki in 2017. His performances of elegant and delicate sounds in acute rhythms particular to a jazz musician have won high artistic acclaim.

[Leonard Slatkin by Kotaro Yamazaki, music critic, Branford Marsalis by Takayuki Komuro, music critic]

Program Notes | Akira Ishii

Toshio Hosokawa (1955–)

Meditation –To the Victims of Tsunami 3. 11– (2012)

Japanese composer Toshio Hosokawa was born in Hiroshima. In 1976, he went to Germany to study composition with Isang Yun, a Korean composer educated in Japan, at the *Hochschule der Künste Berlin* (today's *Universität der Künste Berlin*). He then moved to Freiburg to take lessons from Klaus Huber and Brian Ferneyhough at the *Hochschule für Musik Freiburg* until 1986. Since completing his studies, he has been involved with numerous festivals and events that focus on contemporary music. He was Composer-in-Residence at the Tokyo Symphony Orchestra between 1998 and 2007. In 2001, he became the Music Director of the Takefu International Music Festival, one of the best-known concert series of contemporary music in Japan. He has been Guest Professor at the Tokyo College of Music and Elisabeth University of Music in Hiroshima. Hosokawa's compositions are often characterized as a

symbiosis of Western and Japanese traditions.

Hosokawa's *Meditation* was composed between 2011 and 2012. The piece was commissioned by the Tongyeong International Music Festival and premiered on March 23 during the 2012 Festival. It was dedicated to the victims of the devastating tsunami triggered by the 2011 Tohoku Earthquake and reflects on the aftermath of the tsunami. Hosokawa has been always interested in expressing "the unification of humans and nature, and the beautiful correspondence between them through music." For his *Meditation*, however, he had to deal with the unbalanced circumstance created by the arrogant attitude of the humans towards the nature. Hosokawa says, "... the 2011 Earthquake made us once again realize the terror and violence of nature, and at the same time, it was a strong warning against humans who forgot that and kept on devouring the energy created by nuclear power."

John Adams (1947-)

Saxophone Concerto (2013)

American composer John Adams was born in Worcester, Massachusetts in 1947. He became interested in composing at a relatively young age and started to write music in his early teens. He studied composition at Harvard University, earning a BA in 1969 and a MA in 1972. His teachers there include Leon Kirchner and Roger Sessions. In 1971, he moved to California and began teaching at the San Francisco Conservatory of Music. He received the Composer-in-Residence appointment with the San Francisco Symphony Orchestra in 1982. In 1987, Adams composed one of the most talked-about pieces of his early period, *Nixon in China*, an opera inspired by the historical visit of President Richard Nixon to China in 1972. Incidentally, the composition calls for a quartet of saxophones, instruments that are rarely utilized by composers of serious music. His other operas include his highly controversial *The Death of Klinghoffer* (1991), *Doctor Atomic* (2005), *A Flowering Tree* (2006), and *Girls of the Golden West* (2017).

Adams composed his Saxophone Concerto in early 2013. Its first performance took place in Sydney on August 22 of the same year, with the composer conducting the Sydney Symphony Orchestra. The soloist was Timothy McAllister, who inspired Adams to write the piece. Adams had known the saxophonist since the time he composed his jazz-inflected symphonic work *City Noir* (2009). According to Adams, "His [McAllister's] exceptional musical personality had been the key ingredient in performances and recordings." For the performance of the Saxophone Concerto, Adams prefers the sound in the style of jazz playing over the so-called classical French manner. What the composer expects from the saxophone is, however, beyond the question of the jazz or classical sound. Adams writes technically demanding passages as well as highly expressive melodies for the soloist.

The Concerto has two movements, a structure different from that of Adams's well-known compositions, including his Violin Concerto (1993) and *Century Rolls* for piano and orchestra (1997). The long first movement comprises contrasting segments, some fast and vigorous, others, slow and lyrical. The opening saxophone passage, for instance, consists of a series of short motifs appearing in a brisk manner that immediately becomes smooth and expressive. The shorter but more jubilant second movement exhibits jazz-related rhythms from beginning to end.

A

11 & 12 APR 2020

Symphony No. 5 D Major

Ralph Vaughan Williams was a British composer, his active career spanning the late nineteenth to the mid twentieth centuries (Incidentally, Vaughan is not his middle name but a part of his surname). While influences of the late Romanticism developed by German composers can be observed in his works, Vaughan Williams in general attempts to break off from the tradition, tirelessly exploring English sounds. He was born in a small village in Gloucestershire, about ninety miles west of London. He and his mother along with his siblings, however, had to move to a rural area in Surrey, a county in South East England, when his father suddenly died in 1875. At the age of five, Vaughan Williams received his first lessons on piano but soon discovered that the instrument was not for him. A year later he switched to the violin. Meanwhile, he became interested in composing. In 1890, Vaughan Williams matriculated at the Royal College of Music in London, studying composition with Hubert Parry, who encouraged Vaughan Williams to write choral music, an English tradition that had been passed on since the Renaissance period.

Vaughan Williams wrote his Symphony No. 5 in D Major between 1938 and 1943. Much of the piece was derived from *The Pilgrim's Progress*, an opera he worked on prior to the completion of his Fifth Symphony. The piece was dedicated to the Finnish composer, Jean Sibelius, who was highly regarded by a number of British composers at the time. The first performance of the symphony took place in London at a Proms Concert at the Royal Albert Hall on June 24, 1943, with the composer conducting the London Philharmonic Orchestra.

The overall mood of the Fifth Symphony is serene and tranquil, making a sharp contrast to his previous Symphony No. 4 (1934), which is often regarded as one of the most aggressive, violent, and powerful compositions of the early twentieth century. The calmness that occupies much of the Fifth Symphony may have been the result of the composer's reflecting on the terrible conflict that had begun with the Invasion of Poland by Nazi Germany. The piece comprises four movements. The opening movement, marked *moderato*, begins with a soft drone note played by the cellos and double basses, which immediately created an eerie mood. It is followed by optimistically sounding horns, which are immediately followed by the violin's somber melody. The second movement is a *scherzo*, but the atmosphere here remains relatively placid. The slow third movement begins with a quiet tune played by the English horn, accompanied by the strings. There is also an agitated middle section. The last movement is marked "*passacaglia*," a type of variations that became popular in the baroque period. Unlike the last movement of Brahms's Fourth Symphony, however, Vaughan Williams introduces new ideas in the middle of the movement. Towards the end, Vaughan Williams' hymn *Sine Nomine* appears to conclude the piece.

Akira Ishii

Professor of Keio University. Visiting Scholar at the Free University Berlin between 2007 and 2009. Holds a Ph.D. in Musicology from Duke University (USA).

PROGRAM

B

Concert No.1938 Suntory Hall

April

22(Wed) 7:00pm

23(Thu) 7:00pm

conductor | Leonard Slatkin | for a profile of Leonard Slatkin, see p.51

violin | Ray Chen

concertmaster | Fuminori Maro Shinozaki

Franz Joseph Haydn

Symphony No. 70 D Major Hob. I-70

[18']

- I Vivace con brio
- II Specie d'un canone in contrapunto doppio:
Andante
- III Menuet: Allegretto-Trio
- IV Finale: Allegro con brio

Felix Mendelssohn Bartholdy

Violin Concerto E Minor Op. 64 [30']

- I Allegro molto appassionato
- II Andante
- III Allegretto non troppo—Allegro molto vivace

— intermission (20 minutes) —

Cindy McTee

Symphony No. 1:

Ballet for Orchestra (2002) [30']

- I Introduction: On with the Dance
- II Adagio: Till a Silence Fell
- III Waltz: Light Fantastic
- IV Finale: Where Time Plays the Fiddle

Artist Profile

Ray Chen, violin



Ray Chen is a violinist who captivates listeners' hearts by his outstanding technique and a poetic yet passionate playing. In the 2019/20 season, he has worked with the Pittsburgh Symphony Orchestra, the Bamberg Symphony, the London Philharmonic Orchestra and the Melbourne Symphony Orchestra. He also plays in recitals in large concert halls as well as chamber music concerts. He was born in Taipei, and grew up in Australia. After learning the violin by the Suzuki Method and at the Sydney Conservatorium of Music, he entered the Curtis Institute of Music in Philadelphia

B

22 & 23 APR. 2020

to study under renowned violinist Aaron Rosand (1927–2019). He won the Yehudi Menuhin International Competition for Young Violinists held in Cardiff in Britain in 2008, and the Queen Elisabeth Competition in Brussels in the following year and came under the limelight. He made a recording of Mendelssohn and Tchaikovsky concertos with the Swedish Radio Symphony Orchestra under Daniel Harding in April 2011. These are the memorable concertos he played at the final rounds of the above-mentioned competitions. He plays the 1735 “Samazeuilh” Stradivarius on loan from the Nippon Music Foundation. This is his first collaboration with the NHK Symphony Orchestra.

[Ray Chen by Yoshimichi Okuda, music critic]

Program Notes | Akira Ishii

Franz Joseph Haydn (1732–1809)

Symphony No. 70 D Major Hob. I–70

When Haydn wrote his first symphonies as *Kapellmeister* at the household of Count Morzin in the late 1750s, this type of instrumental music was very much in the early stage of development. The symphonies, however, came to evolve rapidly by the time Haydn obtained a post as *Vice-Kapellmeister* at the court of the wealthy Hungarian Esterházy family in 1761. There, Haydn wrote most of his over-one-hundred symphonies until he was released from his fulltime work in 1790.

Haydn's Symphony No. 70 in D Major Hob. I–70 was written in late 1779. It was composed to commemorate the beginning of construction of a new opera house in the Eszterháza estate. To reflect the celebratory mood of the event, Haydn begins the work with a series of notes taken only from the bright-sounding D-major chord. The second movement is a set of variations based on a melody constructed with complicated contrapuntal ideas. After the minuet and trio movement (the third movement), Haydn initiates the finale oddly in a minor key. Moreover, the first part of its main theme consists only of five repeated notes on D. He then begins a substantial fugue with three subjects (melodies). The mood here remains intense partly because the section is still in a minor key. The movement eventually brightens up by shifting to the key of D major. Haydn, however, brings back the opening segment of the main theme (five repeated notes on D) at the end, thus intentionally excluding a note that determines the final chord to be in a major or minor key.

Felix Mendelssohn Bartholdy (1809–1847)

Violin Concerto E Minor Op. 64

Mendelssohn's Violin Concerto in E Minor, Op. 64 was completed on September 16, 1844 and premiered the following year on March 13. The violin soloist was Ferdinand David, a long-time friend of Mendelssohn's. He was also the concertmaster of the *Gewandhausorchester* (Leipzig Gewandhaus Orchestra), where Mendelssohn was music director between 1835 and 1847. The composition has three movements and follows the traditional fast-slow-fast structure of the concertos of the time. Mendelssohn, however, intends to have no pauses between the

movements. To make it clear, the composer writes, for instance, a brief bridging section consisting of a single sustained note played by the bassoon at the end of the first movement, a manner that is astonishingly simple but effective.

The concerto begins without a full-length orchestral introduction. Mendelssohn previously adopted this concept for his piano concertos. He, however, expands upon it by letting the solo violin enter only after one and a half measures (the full orchestra does not play the main theme until the forty-seventh measure). The opening movement is filled with melancholic moods with melodies that are rather simple but emotionally inductive. The second movement is in a major key, and its main theme is calm, tranquil, and pleasing. There is also a contrasting section that exhibits passionate feelings, expressed through a long series of violin's double stopped notes. At the beginning of the finale, Mendelssohn writes a somber melody in a minor key in a modest tempo. This, however, lasts only fourteen measures. With the fanfares played by the brass and percussion instruments, the mood and tempo is quickly lifted for the main section of the final movement.

Cindy McTee (1953–)

Symphony No. 1: Ballet for Orchestra (2002)

American composer Cindy McTee was born in 1953 in the State of Washington. She was exposed to popular and jazz music at an early age through her parents. When she was six years old, she began her piano lessons. A few years later she started to play saxophone — her teacher was her mother. While working towards a bachelor's degree in composition at Pacific Lutheran University, McTee met the Polish composer Krzysztof Penderecki. She then went to his native land to stay with his family for one year, attending the Cracow Academy of Music. She acquired graduate degrees from the Yale School of Music (MM) and University of Iowa (PhD). She has been commissioned by numerous orchestras in the United States, including the National Symphony Orchestra in Washington D.C., which commissioned McTee to compose her Symphony No. 1 *Ballet for Orchestra*.

The first performance of McTee's Symphony No. 1 *Ballet for Orchestra* took place at the Kennedy Center for the Performing Arts in Washington, D.C. in October 2002. As its title suggests, the composition reflects McTee's strong interests in dance music. She once wrote about the genesis of the piece, saying, "Music is said to have come from dance — from the rhythmic impulses of men and women. Perhaps this explains my recent awareness of the inherent relationships between thought, feelings, and action — that the impulse to compose often begins as a rhythmical stirring and leads to a physical response — tensing muscles, gesturing with hands and arms, or quite literally, dancing." The composition has four movements, whose "macro-structure is," according to the composer, "modeled after the classical symphonies of Haydn and Mozart." The first movement exhibits elements of jazz rhythms and sounds. In addition, McTee says that the movement is "inspired by the opening theme of Beethoven's Symphony No. 5," whose famous opening motif is utilized to develop the movement. The second movement begins with just strings, which "provide a more intimate mood." Modeled after the symphonies of the late eighteenth century, the third movement is a dance. In the last movement, references to Stravinsky's *Rite of Spring*, ballet music, can be heard.

Akira Ishii | For a profile of Akira Ishii, see p.54

B

22 & 23 APR. 2020

PROGRAM

C

Concert No.1937 **NHK Hall**

April

17(Fri) 7:00pm

18(Sat) 3:00pm

conductor | **Leonard Slatkin** | for a profile of Leonard Slatkin, see p.51

narrator | **Kanji Ishimaru***

English horn | **Hitoshi Wakui**□

Trumpet | **Kazuaki Kikumoto**□

concertmaster | **Kei Shirai**

The 120th and 30th Anniversary of
Copland's Birth and his Death

Aaron Copland

4 Dance Episodes from "Rodeo,"
ballet [18']

I Buckaroo Holiday

II Corral Nocturne

III Saturday Night Waltz

IV Hoe-Down

Aaron Copland

Quiet City□ [10']

Aaron Copland

A Lincoln Portrait* [14']

— intermission (20 minutes) —

Aaron Copland

"Appalachian Spring," ballet [38']

Artist Profile

Kanji Ishimaru, narrator



Kanji Ishimaru was born in Ehime Prefecture in 1965. He became familiar with various musical instruments such as piano, trombone and cello in his childhood, and studied saxophone at Tokyo College of Music, and singing at Tokyo University of the Arts. From 1990 to 2007, he was with Shiki Theatrical Company and performed in musicals including the *Phantom of the Opera*, *West Side Story*, *Beauty and the Beast* and

Amour. After leaving the company, as an actor at the forefront of Japan's popular musicals, he

played the leading roles in *Love Never Dies*, *Jekyll & Hyde* and *Parade*. He has appeared in television dramas including NHK's historical drama called *Hana Moyu*, remains active in music performances and has released solo albums of his own, and together with Takashi Tsunoda, a lute player, released an album titled *Takemitsu Songs*. He is also closely involved in classical music, acting as a narrator for Stravinsky's *L'Histoire du soldat* and Grieg's *Peer Gynt*, and since 2017, he has been hosting a classical music program on television. This is his first appearance in a concert by the NHK Symphony Orchestra.

Program Notes | Akira Ishii

Aaron Copland, the son of Russian-Jewish immigrants, was one of the best-known American composers in the twentieth century. Unlike some others, however, Copland did not pursue the academism of classical music, only broadly adopting newly created modern compositional techniques or concepts such as the twelve-tone system. Instead, he focused on creating sounds that can be easily identified as “American.” He often portrayed in his works American landscapes that are strongly associated with the pioneer spirit of early America.

Aaron Copland (1900–1990)

4 Dance Episodes from “Rodeo,” ballet

Copland was commissioned to write music to the ballet *Rodeo* by the *Russe de Monte Carlo*, a ballet company that had moved to the United States to avoid the chaotic and hopeless situations in Europe caused by the outbreak of the Second World War (many of the key personnel of the company were Russian Jews). Copland completed the ballet in 1942, premiering it that year at the Metropolitan Opera House in New York City on October 16. (Four Dance Episodes from *Rodeo* premiered on May 28, 1943). Copland had previously composed music for another ballet titled *Billy the Kid*. To portray the “Wild West,” he incorporated into the work a number of American folk songs, including those with strong ties to cowboys and their lifestyles. Copland approached *Rodeo* in a similar manner, since this ballet too deals with the American West. It is about a young woman, who wishes to be recognized as a skillful rancher by the head wrangler. He disregards her skills but becomes attracted to her when he sees her dance. After the success of the first run of the ballet, Copland created an orchestral suite (Four Dance Episodes from *Rodeo*) using much of the music in it. The American elements are particularly evident in its last movement, “Hoe-Down,” which depicts the cowgirl’s wild dance.

Aaron Copland

Quiet City

Copland’s *Quiet City* was originally intended as incidental music to the play of the same title written by the American writer Irwin Shaw. The story is about two brothers, who lead considerably different lifestyles from one another. One is a trumpeter, who leads a riotous life and wanders about the streets of New York City at night. The other is a successful businessman, who repents having decided to abandon his passion for arts. The trumpet plays a key role in

the story, since its sound produced by one of the brothers distresses the other. Copland's piece reflects on this, as he emphasizes the instrument and gives it many solo passages. Copland later reworked the piece so that it could be performed independently of the play. The new version is scored for trumpet, English horn, and strings. Much of music in the orchestra version sounds serene, perhaps illustrating one of the brothers playing the trumpet at the break of dawn.

Aaron Copland

A Lincoln Portrait

Around the time Copland received a commission to compose his *Lincoln Portrait*, he was also asked to write another patriotic piece. This was the *Fanfare for the Common Man*, composed in 1942. The conductor of the Cincinnati Symphony Orchestra, Eugene Goossens, contacted several composers to write fanfares, which he wished to perform at the concerts of his orchestra for the purpose of provoking people's patriotic feelings. The circumstance was similar with the *Lincoln Portrait*, which was commissioned by Andre Kostelanetz, a conductor of orchestras that specialized in popular music. Like Goossens, Kostelanetz asked prominent American composers to write pieces on American themes specifically compositions that would portray well-known American figures. Copland wanted Walt Whitman but had to settle with Abraham Lincoln. He completed the piece, the *Lincoln Portrait*, in April 1942. The composition quotes folk songs of Lincoln's era like "Springfield Mountain" and Stephen Foster's "Camptown Races" as well as Lincoln's speeches, including the Gettysburg Address (narrated).

Aaron Copland

"Appalachian Spring," ballet

The American modern dancer and choreographer Martha Graham asked Copland in 1942 to compose music to a ballet on American themes. The following two years the composer worked on it. The premiere of the piece took place at the Library of Congress in Washington, D.C. on October, 30, 1944. The lead dancer was Graham (the set was incidentally designed by Isamu Noguchi). After the success of his two previous ballets—*Billy the Kid* and *Rodeo*, Copland had established himself as a composer of American music, a recognition that led to a series of patriotic compositions in the war period. In the *Appalachian Spring* too, Copland shows no hesitancy in creating sounds that can easily be identified as American. The ballet is about a newlywed couple thinking about their future together. It is set in the springtime in rural western Pennsylvania. Copland utilized a Shaker hymn ("Simple Gifts") and makes variations on it in one of the most essential scenes of the ballet. The tune, however, can be regarded as being inappropriate. He later says, "My research evidently was not very thorough, since I did not realize that there have never been Shaker settlements in rural Pennsylvania!" The *Appalachian Spring* was originally scored for a small chamber ensemble of thirteen instruments. In 1954, Copland reworked the composition, scoring it for a full orchestra.

Akira Ishii | For a profile of Akira Ishii, see p.54



公演報告
2020年
01
定期公演
SUBSCRIPTION CONCERTS
IN JANUARY, 2020

月

1月の定期公演は、2人の名匠が指揮台に登場。クリストフ・エッセンバハは、Aプロでは世界で活躍する2人の歌手とともにマラーを、Cプロでは盟友ツィモン・バルトとともにブラームスを披露。Bプロに登壇したファビオ・ルイージは、ウェーバーとR. シュトラウスからなるドイツ・プログラムに挑み、いずれも重厚かつ歌心に満ちた公演となりました。

Aプログラム マラー／交響曲 第2番 ハ短調「復活」(2020年1月11、12日、NHKホール)
Bプログラム ウェーバー／歌劇「オイリアンテ」序曲、R. シュトラウス／4つの最後の歌、R. シュトラウス／交響詩「英雄の生涯」作品40(2020年1月22、23日、サントリーホール) Cプログラム ブラームス／ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調 作品83、ブラームス(シェンベルク編)／ピアノ四重奏曲 第1番ト短調 作品25 (2020年1月17、18日、NHKホール)



(左) A・Cプロの指揮を執ったクリストフ・エッセンバハ
(右) 左から、Aプロのマラー《交響曲第2番「復活」》で独唱を披露したマリソル・モンタルヴォ(ソプラノ)と藤村実穂子(メゾ・ソプラノ)
(いずれも1月11日)



(上) BプロのR. シュトラウス《交響詩「英雄の生涯」》。
ヴァイオリン独奏はライナー・キュッヒルが務めた
(左) Bプロの指揮を執ったファビオ・ルイージ
(右) BプロのR. シュトラウス《4つの最後の歌》で
ソプラノ独唱を披露したクリスティーネ・オボライス
(いずれも1月22日)



(上) Cプロのブラームス(シェーンベルク編)
《ピアノ四重奏曲第1番》
(左) Cプロのブラームス《ピアノ協奏曲第2番》で
ソリストを務めたツィモン・バルト
(いずれも1月17日)



公演報告

2020年 02月 定期公演

SUBSCRIPTION CONCERTS
IN FEBRUARY, 2020

2月定期公演は2人の指揮者が登場。A・Bプロでは首席指揮者のパーヴォ・ヤルヴィが、ブルックナー《交響曲第7番》とラフマニノフ《交響曲第2番》をヨーロッパ公演に先駆けて披露。一方Cプロでは、気鋭ラファエル・パヤールレがショスタコーヴィチの作品から《バレエ組曲第1番》《チェロ協奏曲第2番》《交響曲第5番》と多様な曲目を取り上げました。

Aプログラム アブラハムセン／ホルン協奏曲(2019) [NHK交響楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、NTR土曜マチネ、シアトル交響楽団、オークランド・フィルハーモニー管弦楽団共同委嘱／日本初演]、ブルックナー／交響曲 第7番 ホ長調 (2020年2月15、16日、NHKホール) **Bプログラム** プロコフィエフ／ヴァイオリン協奏曲 第1番 二長調 作品19、ラフマニノフ／交響曲 第2番 短調 作品27 (2020年2月5、6日、サントリーホール) **Cプログラム** ショスタコーヴィチ(アドヴァン編)／バレエ組曲 第1番、ショスタコーヴィチ／チェロ協奏曲 第2番 長調 作品126、ショスタコーヴィチ／交響曲 第5番 二短調 作品47 (2020年1月31日、2月1日、NHKホール)



左から、A・Bプロの指揮を執ったパーヴォ・ヤルヴィ、Aプロで自身の作品が日本初演されたハンス・アブラハムセン、Aプロのアブラハムセン《ホルン協奏曲》で独奏を務めたシュテファン・ドール (2月15日)



(上) Bプロのラフマニノフ《交響曲第2番》

(左) Bプロのプロコフィエフ《ヴァイオリン協奏曲第1番》で独奏を披露したレティシア・モレノ
(いずれも2月5日)



(左) Cプロの指揮を執ったラファエル・バヤール
(右) Cプロのショスタコーヴィチ《チェロ協奏曲第2番》で
ソリストを務めたアリサ・ワイラースタイン
(下) Cプロのショスタコーヴィチ《交響曲第5番》
(いずれも1月31日)

